

本誌編集長の想い

実感があるからこそ生きる、データという補助線

何を根拠にして進路を選ぶのか

ここまでのデータをご覧になり、先生方はどんなことを思われましたか？

先に個人の考えを申し上げますと、一番強く感じたのは「みんなで共有していた『答え』が減った」ということでした。例えば、これまでは「大学に行ったほうが仕事の待遇などで有利になる」と言われる側面がありました。が、大学卒と高校卒の賃金水準の差は狭まり、その通念が揺らいでいます。「ホワイトカラーのほうがブルーカラーより高収入を望める」という見方も、最新データでは必ずしも当てはまりません。大学入試は、以前は「年明けの一般選抜で受けるのが本筋」とされていましたが、今や大学進学者の半数が年内入試で、その納得度も高く、一概にそうとも言えなくなりました。

つまり、進路に悩む高校生にとって、また私たち大人にとっても、「これを選べばまあ大丈夫」とされてきた答えが、自分の外側からどんどん消えているのです。「世間的な常識を踏まえて正解を探り、計画を立てて進む」といった人生設計を

しづらくなりました。となると何を根拠に進路を選ぶべきなのでしょう？

活路となりそうなのは、答えを外側にだけ求めず、自分の内側も探ることだと考えます。好奇心や違和感から「なんとなく気になる」ものを見出し、そこから「自分はどうしたい？」という動機を育み、内から生じた思いをもって踏み出す。内発的動機から進路を見定めることが、ますます大事になってきたように思います。

現場の感覚とデータを照合して

このように思考をめぐらすとき、私の場合は、いきなりデータを眺めることはしないよう心がけています。まずは現場などに足を運んで見学や対話を重ね、「なぜだろう」「こうではないか」という問いや仮説を立て、それを確かめるためにデータを追います。視点が定まってくると、見えてくるものがあるからです。一方、小社には、データの収集と分析から入り、マクロの変化をつかむのに長けた者もいます。ただし彼らも、データから類推したことを確認するために、そのあとで必ず現場に赴きます。社会で起きていることを捉

えるときは、個別の事象を見ることが、データを見ること、双方を往還させていくことが重要なのではないのでしょうか。

日々多様な生徒と接し、支援されている先生方だからこそ、実感し、お考えになることが多々あるかと思えます。その実感に基づく思考を深めるためにこそ、本誌のデータがお役に立てればと願っています。

例えば、学校現場での認識と、データから読み取った全国や世界の動向に何らかのギャップがあったとすれば、その両方の視点を生かし、生徒の進路をより柔軟に支援できるかもしれません。また、現場で感じていたことがデータにも表れていて、「やっぱりそうだった」と確信に変わることもあるかと思えます。それは決して無意味なことではなく、データの裏付けを得られると、より自信をもって生徒の背中を押すための、心強い材料になると思うのです。

保護者や生徒の認識は

昨年行った保護者の意識調査※に関わるエピソードを紹介させていただきます。調査



赤土 豪一

結果によると、保護者の約7割は、高校生になった子どもへの進路のアドバイスが難しいと感じていました。主な理由は「社会がどうなるか予測がつかないから」「入試制度をはじめ最新の進路情報を知らないから」です。子どもに投げかける言葉としては「好きなことをやりなさい」が圧倒的1位となっていました。

この現状について高校生に本音を聞いてみたところ、やりたいことを応援してもらえて嬉しい反面、判断材料が足りないことには「もっとアドバイスをほしい」という声が大多数だったので。進学や就職の現場を知り、データから社会の変化もつかんで、共に悩み、アドバイスをしてくれる先生は、生徒からしても頼もしい存在なのだと思います。次のページからは、その生徒との関わりも含めて、進路選択の支援にデータをどう活用していけるかを追いかけていきたいと思います。

変化の渦中で、
高校生や高校現場の
実感は？

